

“Young America Movement” とホーソーン

— “A Select Party” にみる *The Democratic Review* が牽引した時代

庄 司 宏 子

ホーソーンの“Topsy-Turvy”

“Mr. Noble Melancholy” (Lathrop 75) と称され、孤高の芸術家の風貌とその「ロマンス」のヴェールによって、ホーソーンは自分が生きた時代が直面していた奴隷制度や人種の問題についてあまり関わりを持たなかったと考えられがちであった。しかし近年のホーソーン批評は、作家と同時代の大问题との関わりに熱い視線を注いでいる。¹

ホーソーンと黒人および奴隷制度との関わりについては、Jean Fagan Yellin による研究により、作家の私生活における交渉やロマンスへの影響などかなりな程度明らかにされている。ホーソーンの生まれ育った Salem は植民地時代にはニューイングランド産のラム酒とカリブ諸島からの奴隷を輸送する港町であり、1780年にマサチューセッツで奴隷制が廃止され、1788年に奴隷貿易が禁止された後も奴隷貿易は容易には止まなかったとされ、セイレムの奴隷貿易に関わった船長や商人としてホーソーンの祖先の Captain Benjamin Hathorne の名も挙がっている (Moore 12-13)。² 奴隷交易の繋がりもあり、その後徐々に解放された元奴隷を主として、19世紀初めホーソーンの幼少時代にはセイレムの人口約1万のうち、人口の3%程度の300人が free black であったという (Yellin 138)。作家ホーソーンとの関わりでは、彼が幼少の頃に Maine で過ごした夏の友人のひとり William Symmes は黒人であった (Mellow 104-5)。また Bowdoin 大学時代には John Russwurm という黒人のクラスメートがいた (Bridge 30)。さらに、*The Scarlet Letter* を出版した後、Lenox に引っ越した Hawthorne 一家は Mrs. Peters という黒人の家事使用人を雇っており、主に息子 Julian の世話に当たっていた (Hawthorne *American Notebook* 462-63)。

さらにホーソーンの末子 Rose は、その回想録の中で「父はあまり優しい言葉を言うほうではなかったが、人生の強い味方であるという感覚を与えてくれた」として、そうした例として3歳であったローズが病気で具合が悪いと

き、父が「黒人の人形」を持ってきてくれたと記している (Lathrop 163)。その人形は母 Sophia によると、「とても醜かったし、私はニグロを見たことがなかったので、私を驚かせるためのものだった」(Lathrop 163)。この黒人の人形の贈り物の話はローズの年齢から 1854 年頃のエピソードであるが、ホーソーの人種に関する態度の一端を示しているように思われるので、以下に引用してみたい。

I remember the much-knowing smile with which my father's face was indefinitely lighted up as he stood looking at me, while I, half unconscious to most of the things of this world, was nevertheless clutching his gift gladly to my heart. The hideous darky was soon converted by my nurse Fanny (my mother called her Fancy, because of her rare skill with the needle and her rich decorations of all sorts of things) into a beautifully dressed footman, who was a very large item in my existence for years. *I thought my father an intensely clever man to have hit upon Pompey, and to have understood so well that he would make an angel.* All his presents to us Old People, as he called us, were either unusual or of exquisite workmanship. The *fairy quality* was indispensable before he chose them. (163; my emphasis)

ホーソーが子供たちに与える贈り物として、「ポンピー」(黒人の従僕)が「天使」に転じるという「魔法の要素」を大事にしたというのは、ホーソーのロマンス *The Scarlet Letter* (1850) における汚辱の徴から勝利の徴へと転じる「緋文字A」の軌跡を想起させ興味深いものである。ここではこの黒人の人形のエピソードが人種や奴隷制に関するホーソーの感受性や想像力のあり方を示すものとして捉えてみたい。ローズが記したこの人形のエピソードは、「醜」なるものと「聖」なるもの、^{デーキ}「黒」と^{エンジェル}「白」とが表裏一体のものとして繋がっているという点において“topsy-turvy dolls”を想起させずにはおかない。この「あべこべ人形」とは黒人の少女(召使いの姿の場合もある)と白人の少女の人形が胴体で繋がったもので、その用途については諸説あるものの、アンテベラム期の南部に起源を持つとされる。Wallace-Sanders は、「あべこべ人形」がこの時代のアメリカ社会の「隔たると同時に相互に繋がっている (“simultaneously segregated and interconnected”）」黒人と白人の人種関

係を表すものだという (34)。³ 「あべこべ人形」は、奴隷制度がアメリカの北部と南部の対立と緊張を刻々と激化させるアンテベラム期のアメリカの人種にまつわる言説や、この時代の人種的無意識を視覚化した文化的アイコンといえるだろう。Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* (1852) の出版後は “Topsy” と “Eva” が一対となった人形が作られるようになる。ホーソーンがこうした人形が存在を知っていたかどうかは定かではない (ローズの回想録は、父親から Uncle Tom と Eva を描いた絵をもらったというエピソードも記している [158])。近年のホーソーン研究は、この作家が決して同時代の社会が抱えていた人種問題を等閑視することはなく、「毒」や「瘡」などのモチーフを用いてそのロマンスの中で「混血 (mulatto)」を描こうとしたと論じるなど、作家と人種問題との関わりを精緻なテキスト分析から読み取ろうとする (Brickhouse 184-87)。本論では、ホーソーンが 1840 年代半ばに精力的に短篇を寄稿した *The United States Magazine and Democratic Review* との関わりを中心に、ホーソーンが時代の人種問題——その「トプシー・ターヴィー的狀況」にどのように反応していたのかを考えてみたい。

The Democratic Review と Young America Movement

ホーソーンは 1837 年頃から John L. O'Sullivan と交友を持つようになり、1830 年代後半から 40 年代前半にかけて短篇を他の雑誌よりも多く、彼の編集する *The United States Magazine and Democratic Review* (以下、*Democratic Review* と略す) に寄稿するようになる (オサリヴァンが *Democratic Review* の編集に携わったのは 1846 年までである)⁴。西漸運動の真っ直中の時代にそれを推進し、拡大する国家の中で政治と文学を結びつけ、若きアメリカのナショナリズムの高揚を目指す *Democratic Review* への精力的な寄稿が、アメリカが待望する国家的文学の若き担い手としてのホーソーンの名声を高めたことは確かである。オサリヴァンと彼の *Democratic Review* は、1830 年代にニューヨークに住む都市中間層の若い世代の民主党支持者を中心に起こる政治的・文化的運動の中心であった。彼らは同時代のヨーロッパの運動の影響を受け、共和制や反貴族的運動を支持し、Jefferson 的な農業主体の国家ではなく、商業をベースとした技術革新、改革と統制、国際主義を奉じた。国内の鉄道や運河、港湾、電信や道路の近代的インフラの整備の必要を説いて資本主義を推進する市場革命を支持し、対外的には自由貿易を唱えた。移民間

題（特にニューヨークへのアイルランド系カトリックの移民）にも敏感で、社会的改革の必要性を強調した。彼らは Young Italy や Young Hungary を手本にして、自らを “Young America” と称し、西部や南部へのアメリカのテリトリーの拡大を支持し、西漸運動を強力に推し進める態度を取った。“Young America” という名称は、この運動の文学的グループの結成に活躍した Cornelius Mathews による 1845 年の演説に由来しているとされる (Widmer 14)。同年の *Democratic Review* 7 月-8 月号にはオサリヴァンがその “Annexation” と題された記事において、「神によって与えられた北米大陸に年々人口が増加するわが国が自由に拡大することの明白なる天命 (“Manifest Destiny”）」を唱えて、メキシコ戦争を支持する考えを打ち出した。彼らの運動は Andrew Jackson や James Polk を大統領に選出することで政治的な結実をみる（特に後者の選出に当たっては、*Democratic Review* が大々的に誌上で選挙キャンペーンを展開し、ニューヨークでポークが勝利を収めたことがその後の大統領選を優位に進めることに繋がったとされる）。

1830 年代後半から 1840 年代半ばにいたるこの時期、テキサス併合やメキシコとの戦争を支持し、民主主義や共和制、アングロサクソニズムや国民文学の台頭を国家の拡大と結びつける論陣を張る *Democratic Review* にホーソーが他の雑誌よりも数多く寄稿したことをどのように捉えるべきであろうか。ホーソーは後に、フリーエリズムを実践した Brook Farm 体験を元に構想したロマンス *The Blithedale Romance* (1852 年)において、物語の末尾に、詩人として「グリズウォルド先生 [Rufus Wilmot Griswold] にマイナーな詩人の列に序せられ」(246) 今や中年にさしかかった Coverdale が昔を振り返り自嘲気味に若き時代を告白するシーンを描いている。それはホーソー自身の “Young American” ぶりをいくぶん反映したくんだりとも読めるものである。

Yet, were there any cause, in this whole chaos of human struggle, worth a sane man's dying for, and which my death would benefit, then – provided, however, the effort did not involve an unreasonable amount of trouble – methinks I might be bold to offer up my life. If Kossuth, for example, would pitch the battle-field of Hungarian rights within an easy ride of my abode, and choose a mild, sunny morning, after breakfast, for the conflict, Miles Coverdale would gladly be his man, for one brave rush upon the levelled bayonets. (246-47)

1848年のウィーンからのハンガリーの独立革命を指導し、自由主義の闘争家、ヨーロッパにおける民主主義の先導者としてラヨシュ・コシュートはアメリカでも尊敬を集めており、1851年から52年にかけてアメリカを訪問した際には熱狂的な歓迎を受け、ボストンで51年に行われたコシュートの講演会にはホーソーンも出かけている。コシュートの名前はおそらくホーソーンの中で、1840年代半ばの *Democratic Review* と “Young America” の活動およびその後の衰退と失望と結びついていたと思われる。

1830年代後半から1840年代の半ばにかけてのこの時期、ホーソーンは、政治的にはウィッグ党寄りであり *abolitionism* を支持する Emerson や Thoreau、それに妻 Sophia の姉 Elizabeth Peabody などコンコードやボストンの Transcendentalists というよりは、ニューヨークをベースとし、民主党で *abolitionism* を批判する *Democratic Review* とそれが推進する “Young America movement” に近い位置をとっていた。エマソンとオサリヴァンの二人はともに1837年に、前者は “The American Scholar” において、後者は *Democratic Review* を創刊することで、アメリカの文学的マニフェストを立ち上げる。二人の文学的ヴィジヨナリーはアメリカの文化的空白を充溢させようとする気迫の点で似ているものの、両者は大いに異なっている。コンコードの賢人が唱える文芸運動は「自己信頼」に満ちた「個人」によるものであるのに対し、オサリヴァンが提唱する運動は、新しい文化を若き文学者たちの連帯として創造し、それを民主主義を推進するものとして政治や社会改革に結びつけることであった。この時期、ボストンとニューヨークの双方に、西漸運動や奴隷制度などの政治や社会的問題について立場を異にする二つの文芸運動の拠点があったといえるだろう。植民地以来のピューリタニズムやその文化を背景とするホーソーンが、ポスト・ジャクソンの時代に自らの出自のニューイングランドで展開される Transcendentalism ではなく、オサリヴァンが主導するニューヨークの “Young America” の政治と文化のエネルギーに触れていたこと、それがホーソーンの世界の中でどのような展開をみせたのか、以下に見てみたい。

The Democratic Review の政治性——西漸運動と奴隷制度

メキシコの領土であったテキサスの独立、その後のアメリカへの併合、メキシコ戦争にいたる前夜の1842年から1845年にかけて、*Democratic Review*

は拡張主義と帝国化の路線を辿るアメリカの国家の軌跡とまさに連動する様相を呈している。*Democratic Review* の関心は、テキサス、メキシコ、キューバ、オレゴン、さらにはサンドイッチ諸島に向かい、そうした土地の気候、風土、人々の風習を描いた旅行記はアメリカが必要とする情報をもたらすものとして熱心に書評に取り上げられる。1843年2月号では Madame Calderon de la Barca の *Life in Mexico* の書評が、同年5月号には John L. Stephens の *Incidents of Travel in Yucatan* の書評が掲載され、特に前者は、1844年12月号に発表されるホーソーの “Rappaccini’s Daughter” にインスピレーションを与え、ラパチーニ博士が育てる人工的毒花のモチーフの直接的な源となっていることを指摘しておかなくてはならない。のちに Madame Calderon de Barca となる Frances Erskine Inglis は、スコットランドからアメリカへ家族とともに移民し、ボストンでアルゼンチン生まれの外交官 Angel Calderon de la Barca と出会い、1838年に結婚する。スペインがメキシコを承認したのち夫が初のスペイン大使としてメキシコに赴任するのにもない翌年メキシコへ赴いたバルカ夫人は、1842年までこの地に滞在し、その風土と風習を旅行記に記した。*Democratic Review* の書評は、「われわれ（アメリカ国民の）大部分がほとんど知らないが、重大な関心の対象となっている話題に充実した情報」(218) をもたらし、「メキシコはロマンスに満ちており、メキシコ人の自由への闘争と共和制政府への欲求は、われわれが現在メキシコに寄せる以上のシンパシーに値する」(218) として、テキサスのみならずメキシコ全体の併合に向けた帝国主義的関心をうかがわせている。

西漸運動は領土の拡大によってメキシコやイギリス、スペインとの争いを引き起こすばかりではなく、国内の奴隷制度をめぐる南北の軋轢と緊張を西方にも拡げることになるが、西方への国土の拡張と奴隷制度の問題に関する *Democratic Review* の見解を 1844年7月号の記事にうかがうことができる。

“The Re-Annexation of Texas, in Its Influence on the Duration of Slavery” と題されたその記事は、abolitionism を合理的ではないと退ける一方で、奴隷制の存続と拡大を西の地に求める南部を牽制する姿勢を取る。そして「(テキサスの) 併合は、アメリカの奴隷制度を永続化するどころか、現在のあらゆる状況を鑑みると、奴隷制度を究極的に消滅させるための唯一の根拠のある望みなのである」と主張する。その理屈はこうである。商人、職人、機械工など都市に住む労働者（*Democratic Review* が “The Yankee” と呼ぶ中間層の都市労働

者層はこの雑誌の主たる読者層である)は、多くの土地を必要とすることなく狭い場所で生産効率を上げることができる。しかし本質的に農業従事者である奴隷は、収益を上げるのに広い土地を必要とする。人口が増加し土地の値段が上昇すると狭い場所での生産性は低下し、奴隷の生産量と維持費が見合わなくなるため、奴隷は奴隷所有者たちにとって「貴重な財産 (“valuable property”）」ではなく「やっかいもの (“incumbrance”）」となる。そうなれば奴隷所有者の側で abolition に対する反対がなくなり、「自発的な “abolitionism”」が実現するというのである。余剰人口となった奴隷たちによるテキサス共和国へ、中央アメリカへ、さらに南方への「自主的な移動 (“voluntary emigration”）」が起きると記事は述べる。「人口が過密になった場所では奴隷制は消滅する (“in a densely populated region slavery shall cease to exist”）」 [15]]」であるから「南部の州へと人を移動させよ、迅速に、恐れることなく (“Crowd, then, your population into the Southern States as you may, rapidly and without fear” [15]))」と記事は述べる。テキサスは今や「捌け口 (“an outlet”）」として開かれている。「こうして、静かに、不平の声や何の努力もなく、かつてイギリスの貪欲が招いた恥辱であり、今やイギリスからの不公平で尊大な嘲りの的となっているこの黒い人々による不安と悪に満ちた長逗留 (“this dark visitation of anxiety and evil” [15]) は、ようやく我が岸辺から立ち消える」ことになるとして、植民地時代にイギリスの強欲によって生み出され、今やアメリカに先駆けて奴隷制を廃止した旧宗主国からの愚弄の対象となっている悪しき奴隷制度から脱却することができるのだと記事はいう。テキサス併合は、アメリカにとっては奴隷制を解消する捌け口となると同時に、テキサスにとってはこの地を虎視眈々とねらうイギリスからの干渉を脱することができるのだとする。

Democratic Review は、テキサス併合は、アメリカの黒人奴隷の人口移動を国の南方の国境周辺や国の外に押し出す流れを加速化させるとする。またメキシコや中央アメリカ、さらに南方の広大な土地では、10人のうち9人が「カラード」であり、将軍や議員、大統領は「混血 “mixed blood”」であるとの人種的見解を述べる。*Democratic Review* は西漸運動とテキサス併合が、アメリカの奴隷制度の「自発的な奴隷制度廃止 (“voluntary abolition”）」をもたらし、白人国家アメリカを実現するという人種のポリティックスを唱えている。*Democratic Review* はミシシッピ選出の民主党上院議員 Robert J. Walker をそう

した雑誌の立場を代弁する政治家として押し出し、1845年2月号には“Robert J. Walker”という記事を掲載している。

こうした論を展開する1840年代半ばの *Democratic Review* に多くの短篇を寄稿したホーソーンは、雑誌が推進する西への領土拡大と文芸運動を連動させる文化的ナショナリズム、雑誌が唱える奴隷制度の「自然な解消」や人種のポリティックスにどのように反応し、それに参与しているのであろうか。先の“The Re-Annexation of Texas, in Its Influence on the Duration of Slavery”の記事が掲載された1844年7月号に収録された短篇“A Select Party”のなかにホーソーンと *Democratic Review* の政治性との関わりを探ってみたい。

“A Select Party”にみる1840年代アメリカの姿

“A Select Party”は、*Democratic Review* が打ち上げる西漸運動に連動させた政治と文化のナショナリズム、そのナショナリズムが内包する「白人」国家という人種意識に対するホーソーンの応答とも読める作品となっている。物語は“Man of Fancy”が彼の「天空の城 (“the castle in the air”)」で「選りすぐりの人々」を招いたパーティーを思いつくことから始まる（「空想の男」にオサリヴァンが含まれているのかどうかは定かではない）。天空の城には「空想の男」に招待された面々が地球から次々とやって来る。まずは昔のことなら何でも記憶している「古参の人 (“Oldest Inhabitant”)」が登場し、続いて「自然哲学者 (“scientific philosopher”)」が到来する。国家の秘密から通商に関する重要情報、上流社会の艶聞まで知る「事情通 (“Monsieur On-Dit”）」、その公的地位への敬意から招待された「気象学者 (“Clerk of the Weather”）」、「さまよえるユダヤ人 (“Wandering Jew”）」(パーティーにふさわしい客ではないと見なされた彼はそそくさと「オレゴン」へと旅立つ) が現れる。続いて、「空想の人」が夢見がちな若かりし頃に知り合った「影のような人たち (“shadowy people”)」がやって来て、「空想の男」は過去の知り合いとは「薄暗い歲月」の距離をおいて遠くから崇敬していた方がよいのだと嘆息する(63)。さらにパーティーには、「愛国者 (“Patriot”）」、「学者 (“Scholar”）」、「聖職者 (“Priest”）」、「麗人 (“Beautiful Woman”）」、「改革者 (“Reformer”）」、「詩人 (“Poet”）」がやって来る。「空想の人」が彼らをこの「選りすぐりのパーティー」に招待した理由は、「社会の彼らに対する評価に謹んで敬意を表した」までであるとし、先の「古参の人」も「自分が若かりし頃はこの程度

の人々は街角に溢れていたものだ」(65) と辛辣な言葉を述べる。その他、海魔の「デイヴィー・ジョーンズ (“Davy Jones”)」、扇動家、選挙権をもつ以外には存在の意味のない人々が登場する。「空想の男」のパーティーに招待された「選りすぐりの人々」としてホーソーンが描いているのは、独立革命から半世紀を経て西漸運動の時代(「オレゴン」という地名はそれを端的に表している)に突入した1840年代のアメリカ社会に浮沈する人々——時代の寵児、時代遅れの人々、時代が要請する学問(気象学や自然哲学)、宗教、文学に関わる者たち、政治活動家および彼らに利用される人々であり、植民地時代からデモクラシーの時代に至るアメリカ社会の姿を現実とその影のような人物たちに集約させている。

しかし「選りすぐりの人々」はそれだけではない。*Democratic Review* が唱道する文化的ナショナリズムが待望する人物——“Master Genius”——も登場する。「天才」こそは、「わが国が今か今かと霞のような時のなかにその到来を待ちわびていた人、わが国の知的に未開拓な土壌からアメリカ文学をつくりあげるといふ壮大なミッションを成し遂げると運命づけられた」(66) 人物である。*Democratic Review* は、1845年4月号に“Nathaniel Hawthorne”という記事を掲載し、「(ホーソーンの) 作品こそ、心に届くものであり、気づかぬうちに静かに(心の) 要塞にしっかりと占拠するものだ」(383) として、「わが国の文学の開拓されざる土壌を切り開き、その荒野の危険と苦難に直面した独創的な人物」(383) であるとして、「純粹で、もの静かな、喜ばしい天才とはナサニエル・ホーソーンその人である」(384) と書き、ホーソーンの文学的名声と作家としての地位の確立に寄与するとともに、“Young American”としてホーソーンを位置づけようとする。

Democratic Review が称揚する若きアメリカを謳う国民的文学の担い手への希求は、エマソンもそのエッセイ“The Poet”のなかに記している。「詩人とは新しい想念をもつもの、開示すべき全く新しい経験を有するもの」(329)、「(詩人の) シンボルは全ての人間を解放させ、高揚させる力をさせる……詩人とは自由をもたらす神なのだ……詩人はわれらの鎖を解き放ち、新しい光景へと誘ってくれる」(341-44) が、「いまだアメリカには天才は誕生していない。わが国の比類なき素材の価値を知り、時代の暴挙と物質主義のさなかに神のもう一つの祝祭を見る圧倒的な洞察力をそなえた詩人はまだ現れてはいないのだ」(346) と書く。エマソンのアメリカ的詩人への希求は *Democratic*

Review と同じような愛国的口調を帯びる。

丸太のころがる音、切り倒した木の切り株、政治をかたる声、わが漁場、わがニグロ、そしてインディアン、われわれが自慢し、拒むもの、ごろつきの激昂、正直者の小心、北部の産業、南部の農業、西部の開拓地、オレゴンとテキサス、これらを謳う詩はまだ生まれていない。しかしわれわれの目にはアメリカはひとつの詩なのである。この広大な土地は想像力を眩惑する。(346)

オサリヴァンとエマソン、*Democratic Review* と Transcendentalism——ポストンとニューヨークで展開された同時代の二つの文芸運動は、同じく国民的詩人の誕生への期待で歩調を合わせていたといえる。

ホーソーの“A Select Party”はそうした *Democratic Review* やエマソンの文学的ナショナリズムに連動しているのか、それともそれを批判的にみているのか。この短篇は *Democratic Review* が掲げる文化的ナショナリズムを体現する“Master Genius”を登場させることで雑誌の大義に同調の姿勢を示す一方で、「天才」を「堂々たる椅子 (“the chair of state”）」に座らせるという華々しく大げさな「戴冠」(“state”には「国家」の意も込められているだろう)の様子を描くこと、また「空想の男」のパーティーは最後には嵐によって散々な目にあうこと(「天才」はどこに消えてしまったのだろうか?)でそれを揶揄している。さらに確かに読み取れるのは、ホーソーが暗に示す、オサリヴァンの *Democratic Review* が声高に掲げる国民的文学の誕生への期待はアングロサクソニズムという人種主義と表裏一体だという認識である。“Master Genius”は「温かい光をたたえた深い眼と秀でた白い額」をもつ。「天才」の白さによってその白人性を強調する一方で、“A Select Party”はそれが抑圧するもの、抑圧されることで不気味に回帰してくるものの姿も描き込む。それは「暗くメランコリックな気分するときも、熱に浮かされているときも、常に空想の男に取り憑いていた」(64)もので、空想の城の壁も地上の堅牢な建物の壁もその侵入を阻止できないもの——「ぼんやりとした恐怖のかたちをしたもの」である。それは

老いた醜い黒人の女の姿であった。彼(空想の男)が生家の屋根裏部

屋に潜んでいると想像し、子供のとき猩紅熱で死の淵をさまよったとき、彼のベッドにやってきてニタリと笑ったその黒い影であった。この暗い影が壮麗な大広間の柱をすべるように動きながら旧知の顔つきで彼を眺めていた。男は忘れていた子供時代の恐怖に再び身震いした。(64)

ホーソーンは、*Democratic Review* が唱える拡大する若き国家アメリカのなかで手を携えて進歩する政治と文学、*Democratic Review* が「天空の城」として描き出すアメリカのヴィジョンとその白人ナショナリズムを、国家的「フィクション」と見なしているように思われる。*Democratic Review* が「天空の城」として描き出すアメリカのヴィジョン——「白い額」をした国家待望の詩人と黒人の老婆のかたちをした「黒い影」——ホーソーンはその両者を同じテクスト空間に存在させることで、1840年代アメリカの“topsy-turvy”的人種的状况を鮮烈に描いているといえるだろう。

Notes

- 1 ホーソーンと奴隷制度や人種問題との関わりを論じた近年の研究としては、Simon, Goddu, Yellin, Brickhouse 等がある。
- 2 植民地時代のセイレムに存在したカリブ海諸島からの奴隷としては、魔女事件の発端となった牧師 Samuel Parris 家の Tituba と John English が有名である。
- 3 “topsy-turvy dolls” を19世紀半ばの人種的配置のアイコンとしてこの時代の文学と文化を読み解こうとする批評としては、Wallace-Sanders による研究のほかに、Samuels, Young, Sanchez-Eppler, O’ Loughlin, Bernstein によるものがある。
- 4 ホーソーンと *Democratic Review* および John L. O’ Sullivan との関わりについては、Widmer を参照。

Works Cited

- Bernstein, Robin. *Racial Innocence: Performing American Childhood from Slavery to Civil Rights*. New York: New York UP, 2011. Print.
- Brickhouse, Anna. “Hawthorne’s Mexican Genealogies.” *Transamerican Literary Relations and the Nineteenth-Century Public Sphere*. New York: Cambridge

- UP, 2004. 180-220. Print.
- Bridge, Horatio. *Personal Recollections of Nathaniel Hawthorne*. Charleston: Nabu Press, 2010. Print.
- Emerson, Ralph Waldo. “The Poet.” *Selected Writings of Ralph Waldo Emerson*. Ed. William H. Gilman. New York: Signet Classic, 2011. 325-49. Print.
- Goddu, Teresa A. “Letters Turned to Gold: Hawthorne, Authorship, and Slavery.” *Studies in American Fiction* 29.1 (2001): 49-76. Print.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Blithedale Romance and Fanshawe*. Ed. William Charvat et al. Vol. 3 of The Centenary Edition. Columbus: Ohio State UP, 1964.
- . *The American Notebook*. Ed. Claude M. Simpson. Vol. 8 of The Centenary Edition. Columbus: Ohio State UP, 1972.
- . “A Select Party.” *Mosses from an Old Manse*. Ed. William Charvat et al. Vol. 10 of The Centenary Edition. Columbus: Ohio State UP, 1974.
- Lathrop, Rose Hawthorne. *Memories of Hawthorne*. Boston: IndyPublish.com, 2007. Print.
- Mellow, James R. *Nathaniel Hawthorne in His Times*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1998. Print.
- Moore, Margaret B. *The Salem World of Nathaniel Hawthorne*. Columbia: U of Missouri P, 1998. Print.
- O’Loughlin, Jim. “Articulating Uncle Tom’s Cabin.” *New Literary History* 31.3 (2000): 573-98. Print.
- Samuels, Shirley. “The Identity of Slavery.” *The Culture of Sentiment: Race, Gender, and Sentimentality in Nineteenth-Century America*. Ed. Shirley Samuels. New York: Oxford UP, 1992. 157-71. Print.
- Sanchez-Eppler, Karen. *Touching Liberty: Abolition, Feminism, and the Politics of the Body*. Berkeley: U of California P, 1993. Print.
- Simon, Bruce. “Hybridity in the Americas: Reading Condé, Mukherjee, and Hawthorne.” *Postcolonial Theory and the United States: Race, Ethnicity, and Literature*. Ed. Amritjit Singh and Peter Schmidt. Jackson: UP of Mississippi, 2000. 412-43. Print.
- Wallace-Sanders, Kimberly. *Mammy: A Century of Race, Gender, and Southern*

- Memory*. Ann Arbor: U of Michigan P, 2011. Print.
- Widmer, Edward L. *Young America: The Flowering of Democracy in New York City*. New York: Oxford UP, 1999. Print.
- Yellin, Jean Fagan. "Hawthorne and the Slavery Question." *A Historical Guide to Nathaniel Hawthorne*. Ed. Larry J. Reynolds. New York: Oxford UP, 2001. 135-64. Print.
- Young, Elizabeth. *Disarming the Nation: Women's Writing and the American Civil War*. Chicago: U of Chicago P, 1999. Print.

The United States Magazine and Democratic Review からの記事

- "Madame Calderon's *Life in Mexico*." Vol. 12 (February 1843): 218-19. Print.
- "The Yucatan Ruins." Vol. 12 (May 1843): 491-501. Print.
- "The Re-Annexation of Texas, in Its Influence on the Duration of Slavery." Vol. 15 (July 1844): 11-16. Print.
- "Robert J. Walker." Vol. 16 (February 1845): 157-64. Print.
- "Nathaniel Hawthorne." Vol. 16 (April 1845): 376-84. Print.
- Everett, Alexander H. "The Young American." Vol. 16 (May 1845): 495. Print.
- O'Sullivan, John L. "Annexation." Vol. 17 (July/August 1845): 5-10. Print.